

解

説（あらすじを中心）

豊竹 瞳大夫

# 花競四季寿

模茂都陸平振付

万歳

藤間紋寿郎振付

娘

鶯

（人形役割）

豊竹 咲甫大夫 太夫 吉田文司  
豊竹 靖大夫 才蔵 吉田玉志  
竹本 小住大夫 鶯 娘 豊松清十郎  
澤糸 錦糸 龍清 龍爾

野澤 豊澤 豊澤 豊澤  
鶴澤 鶴澤 錦糸 錦糸  
澤糸 龍清 龍爾

## ひらかな盛衰記

松右衛門内の段

（人形役割）

豊竹 船頭権四郎 吉田玉清  
竹本 千歳大夫 女房およし 豊松清十郎  
澤富助 駒若 君 吉田玉也

奥野澤 喜一朗 腰元お筆 吉田玉也  
竹本 船頭又六 桐吉田和文  
澤富作 船頭富蔵 吉田和文  
宗助 船頭九郎作 吉田和文  
の衆 近所の衆 大ぜい哉臣次生 女路也

逆櫓の段

豊竹 豊澤 宗助 船頭九郎作  
芳穂大夫 豊富助 船頭富蔵  
の衆 近所の衆 大ぜい哉臣次生

望月太明藏社中

文化6年（1809）、大坂の御靈社内の芝居で初演された、四季を描いた景事から、春と冬の二景——太夫と歳歳が鼓の音も軽快に楽しく新春を祝う「万歳」と、雪の中、春に思いを寄せる鶯の精を描いた美しい「鶯娘」を、お届けいたします。

## ■ひらかな盛衰記■

愛しい子を失った家族の悲嘆……幼子の死を巡り対立する船頭と武士の苦悩と和解の物語。

源義経によつて滅ぼされた木曾義仲。その若君を連れて逃げる腰元お筆は、大津で深夜、宿を敵に襲われ逃げたものの、若君は敵の手に。が、亡骸をよく見ると、若君ではなく、同宿していた巡礼、船頭権四郎の孫でした。お筆は、若君を取り戻すべく、笈摺に記された住所を頼りに摂津の福島へ。

そこでは、権四郎と娘およしが、宿で取り違えた幼子を連れ帰つて大切に養い、先方が子供を返しに来る日を待ち侘びていました。が、知らされたのは子供の死。嘆く娘を叱り、悲しみを堪える権四郎。ところが、それに乗じてお筆が“嘆いても戻らぬ子を諦め、若君を返して”などと口にしたため、怒りが爆発。他人の子だからこそ大切にすべきであるのに、死なせておいて、よくもそのような恥知らずなことを……。孫の仇として若君を殺すと息巻き、権四郎が加勢を求めたのは、松右衛門——夫に先立たれたおよしのもとに最近入り婿した男でしたが、意外にも若君の味方に。実は義仲の忠臣権口次郎兼光で、入り婿したのも、権四郎から逆櫓の技を習い、義経の船頭となつて主君の仇を討つためだつたのです。とはいへ、子の犠牲に胸を痛め、舅の恩も継子への義理もわきまえた人物。権四郎の悲しみも怒りも当然としながら、それでも主を討つことはできない、武士と縁を結んだがゆえの運命と諦めてほしいと懇願。忠心と誠実さに心を動かされた権四郎は、恨みを捨てるのでした。

このあと、舟を漕ぐ掛け声も勇ましく松右衛門が海上で船頭たちに逆櫓を指南し、三味線の演奏も躍動的で勇壮な「逆櫓」が続きます。元文4年（1739）竹本座初演、文耕堂ほかが合作した五段の時代物の三段目、豪快で心に強く迫る舞台をお楽しみ下さい。